

5. 若宮祭

六月祭と称し築城以前は若宮の今市場に在りし時、天王社と同時に祭礼が行なわれ祇園祭とも称された。名古屋城が社在地に築城する事になり、御籤の結果で現在地に遷座した。

寛文4年(1664)に神社の造営があり、氏子町内も整って来たので簡単な祭が行なわれる様になった。寛文11年(1671)に笠鉾が出て本格的な祭礼が始まる。末広町の黒船車などの山車が登場したのは延宝2年(1674)からで、最盛期は7輛の山車が氏子町内から曳き出された。

祭礼日は6月15・16日で、15日は試楽祭といい山車は数多の提燈で飾られ、境内も数多の提燈の他大提燈も吊され大変美しく賑やかであった。16日は本楽祭といい旧社地である三之丸天王社へ神輿・山車等の行列が進み、山車は夕方に引き戻す。夜になると数多の提燈を点し様々の囃子を演じて帰る。是を戻り車と云い若宮祭一番の光景であった。

明治維新となり明治6年(1873)、御神幸は一時中絶となり、又氏子町域の変更等もあり、山車のみ曳渡していた。

明治32年(1899)の仁徳天皇千五百年祭より御神事は再興され、氏子の町々より新しい警固を出し新式の祭礼が始まった。山車は5輛(上玉屋町の西王母車は那古野神社の祭車となり、下玉屋町の布袋車は明治24年(1891)に有松へ譲渡された)が参加した。

明治34年(1901)より祭礼日は5月15・16日に変更された。

■若宮八幡社

大宝年間(707-704)に那古野庄今市場に勧請される。
享禄5年(1533)那古野合戦の折、社殿が焼失するも
織田信秀が天文8年(1539)再建する。
その後、豊臣秀吉が社領二百石を寄進し、
天正12年(1585)社殿を再修する。
徳川家康が慶長15年(1610)名古屋城築城の際、
御籤の結果、松原町(後の末広町)に奉遷し
名古屋総鎮守と総称される。
寛文4年に光友公が社殿を造営する。
明治9年(1876)に県社に昇格する。
昭和20年(1945)戦災により社殿等を焼失する。
昭和32年(1957)現在の社殿を造営復興する。



■山車 7輛

黒船車は名古屋系船型で他6輛は名古屋型である。
明治維新後、上玉屋町の西王母車は那古野神社の山車となり、下玉屋町の布袋車は明治24年(1891)に有松へ譲渡された。
明治32年(1899)の御神事再興時、祭車は5輛となった。
黒船車、寿老人車、陵王車の3輛が昭和20年(1945)の戦災で焼失し、現存の福祿寿車を氏子町内が輪番制で曳いている(焼失を免れた河水車は戦後新出来町へ譲渡された)。

■若宮祭 祭車一覧(山車・からくり人形の変遷)

町名	山車名	山車建造年	西暦	山車の形状	人形製作年	西暦	人形作者	所在 ※現存 ※他所で現存
末廣町	船車	延蓬元年	1673	船型	-----	-----	人形はなし(稚児舞)	廃車
末廣町	黒船車	延宝2年	1674	船型	-----	-----	人形はなし(稚児舞)	美濃市相生町で現存
中須賀町	佐夜姫車	延宝2年	1674	不明	延宝2年	1674	不明	廃車
上玉屋町	富士山車	延宝2年	1674	不明	延宝2年	1674	不明	廃車
門前町	花車	延宝2年	1674	不明	延宝2年	1674	不明	廃車
上玉屋町	西王母車	延宝3年	1675	名古屋型	明和9年	1772	竹田寿三郎改正	戦災焼失
下玉屋町	風車	延宝3年	1675	不明	延宝3年	1675	不明	廃車
下玉屋町	布袋車	延宝3年	1675	名古屋型	延宝3年	1675	二代目玉屋庄兵衛	有松町東町で現存
門前町	鶴車	延宝3年	1675	不明	延宝3年	1675	不明	廃車
大久保見町	福祿寿車	延宝4年	1676	名古屋型	延宝4年	1676	山伏多門院	現存
住吉町	産宮参車	延宝4年	1676	屋根あり	延宝4年	1676	不明	廃車
門前町	大神楽車	貞享3年	1686	神楽屋台	-----	-----	人形はなし	廃車
中須賀町	猿舞車	宝永5年	1708	不明	宝永5年	1708	不明	廃車
中須賀町	寿老人車	宝暦元年	1751	名古屋型	宝暦元年	1751	隅田仁兵衛	戦災焼失
住吉町	菊慈童車	宝暦11年	1761	名古屋型	宝暦11年	1761	不明	廃車(部材が新出来町西之切へ)
門前町	陵王車	明和5年	1768	名古屋型	明和5年	1768	不明	廃車
住吉町	河水車	明和9年	1772	名古屋型	明和9年	1772	不明	新出来町中ノ切で現存
末廣町	黒船車(新造)	明和9年	1772	船型	-----	-----	人形はなし(稚児舞)	戦災焼失
門前町	陵王車(新造)	天保5年	1834	名古屋型	天保5年	1834	不明	戦災焼失

- ・祭礼当初は舟型や屋根の無い祭車が多く、名古屋型が定着するのは、1,700年半ばからである。
- ・末廣町の名物祭車の黒船車はからくり人形の演技ではなく、稚児舞を演じていた。
- ・下玉屋町の布袋車は二代目玉屋庄兵衛の作といわれる。

■若宮祭 山車7輛 文化8年頃(開府2百年)の写し ※4輛戦災焼失 若宮祭礼図巻 徳川美術館蔵



末広町黒船車



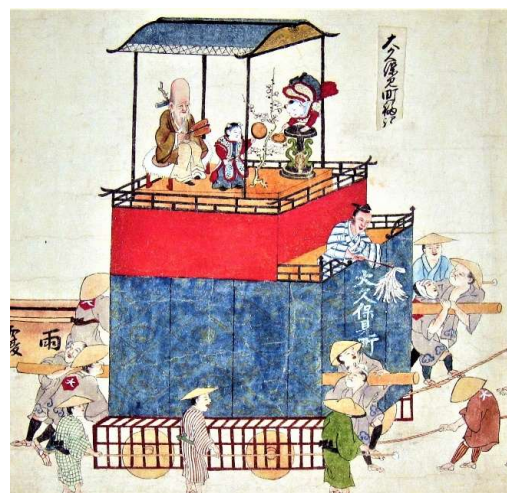
中須賀町寿老人車



上玉屋町西王母車



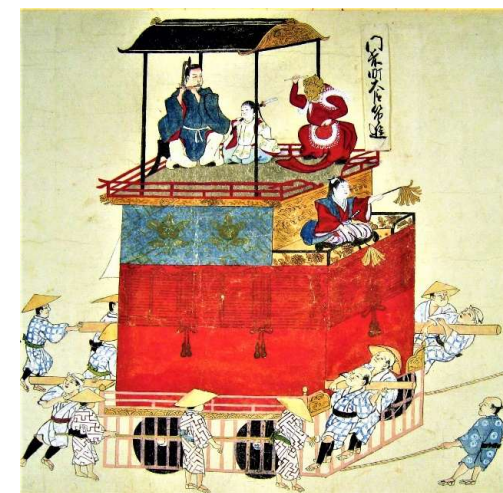
下玉屋町布袋車



大久保見町福祿寿車



住吉町河水車



門前町陵王車

末広町 黒船車(二代目)

明和9年作(1772)

- 延宝元年船車を造る
- 延宝2年(1674)黒船車を造る
- 明和9年(1772)に黒船車を新造
旧車を美濃市相生町へ譲渡

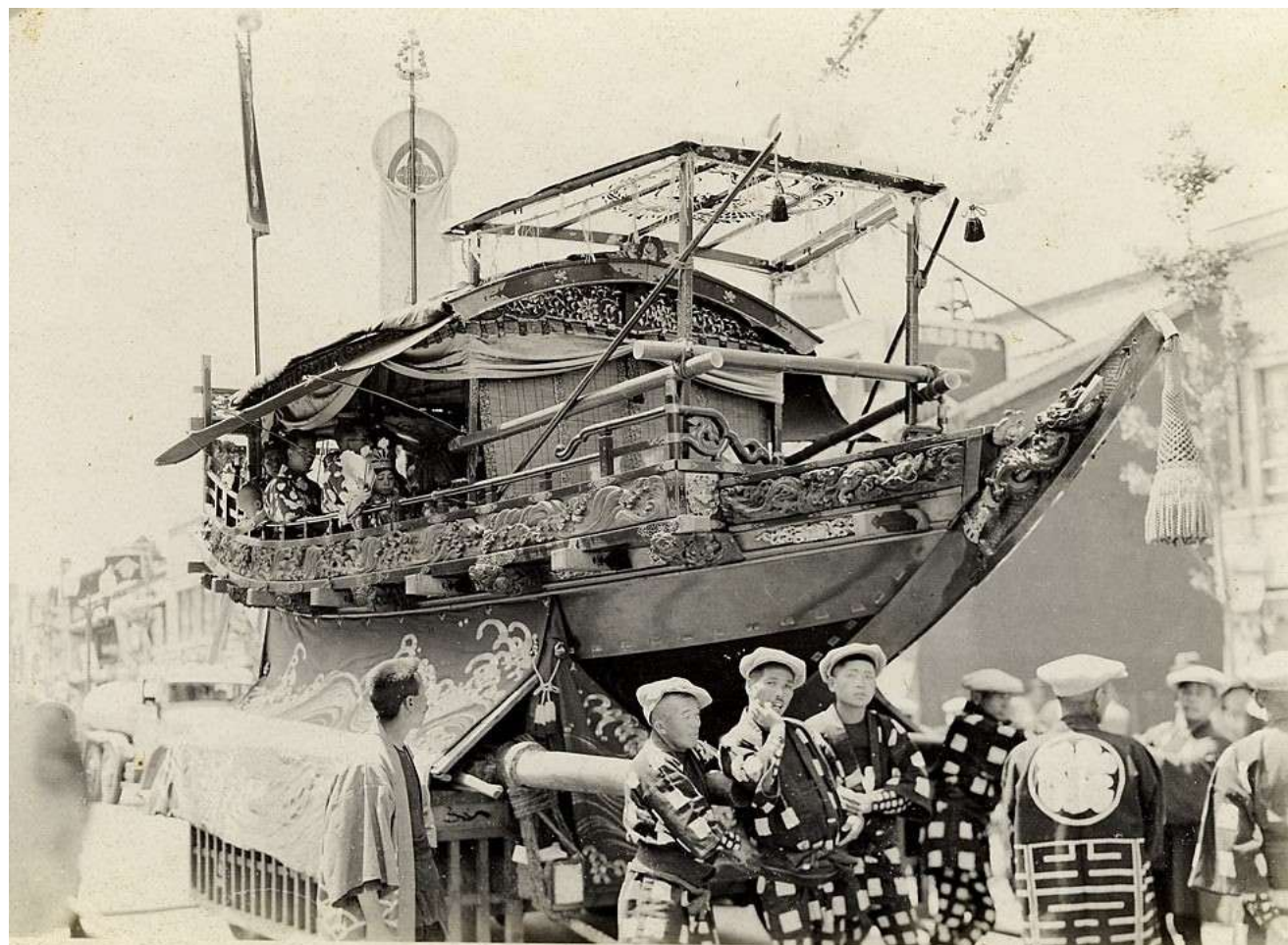
◆舞

からくり人形を用いず、子供が
能の舞を演ずる

猩々、春日龍神、船弁慶の
三番の能楽

◆大幕

花色羅紗に大浪の金糸縫
浪は山本梅逸の筆



中須賀町 寿老人車

宝暦元年作(1751)

- 延宝2年(1674)佐夜姫車を造る
- 宝永5年(1708)猿舞車に替る
- 宝暦元年(1751)寿老人車に替る

大将には寿老人を据へ、其後に鹿を置き、
一人の唐子が太鼓を打てば、もう一人は
獅子頭を着て獅子を舞う
当地人形師隅田仁兵衛の作

◆大幕

猩々緋でちらし雲の中に四神の金糸縫い
下絵は山本梅逸の筆といわれる

◆水引幕

市松形に鳳凰の丸の金糸の縫い潰し



上玉屋町 西王母車

延宝3年作(1675)

- 延宝2年(1674)富士山車を造る
- 延宝3年(1675)西王母車に替る

大唐子が小唐子を肩車し高い桃の枝に
結び下げた糸總にとまらせて退けば
小唐子は左手でぶら下りながら右の手で
太鼓を打つ

土井新三郎の作

◆大幕

猩々緋の無地幕

◆水引幕

白羅紗に唐楽器の金糸縫い



下玉屋町 布袋車 (有松東町で現存)

延宝3年作(1675)

- 延宝2年(1674)風車を造る
- 延宝3年(1675)布袋車に替る
- 明治24年(1891)有松町東町が購入

唐子の文字書き(明和5年:1768作)
一人の唐子が蓮台の上に立ち、幟の様な紙に筆を持って文字を書く。
家々で囃子にあわせ色々な文字を書く。
二代目玉屋庄兵衛の作といわれる。

◆大幕

猩々緋に龍亀麟鳳の金糸縫い
見送には 詩文が書かれた立派な幕
書は柳沢吾一の筆、下絵は山本梅筆の図

◆水引幕

白羅紗に雲鶴の縫いちらし、下絵は張月樵の筆
三面に三羽の鶴が雲の間を飛ぶ様を描く。



大久保見町 福祿寿車

延宝4年作(1676)

- 初発より当車を出す

竹田寿三郎が改正
一人の唐子は団扇太鼓を打ち、もう一人は連台に左手をつき逆立し、頭を振りながら右手で摺鉦を鳴らす。

- ◆大幕

猩々緋の無地幕、徳川斎朝より拝領
金欄を用いた山車が多かったが、当車が猩々緋の無地幕を拝領してから各地へ流行した。

- ◆水引幕

白羅紗に群鶴の縫ちらし
下絵は法眼梅山の筆で、鶴の筆跡は最も見事である。



住吉町 河水車 (出来町で現存)

明和9年作(1772)

- 延宝4年(1676)産宮参車を造る
- 宝暦11年(1761)能楽菊慈童車に替る
- 明和9年(1772)河水龍神車に替る
- 昭和23年(1948)新出来町中ノ切へ譲渡

大将に震旦国の大様を据へ、一人の唐子と前に太鼓があって、其の太鼓の中から龍神が出て舞うからくり。

これは能楽「河水龍神」から取材したもの

◆大幕

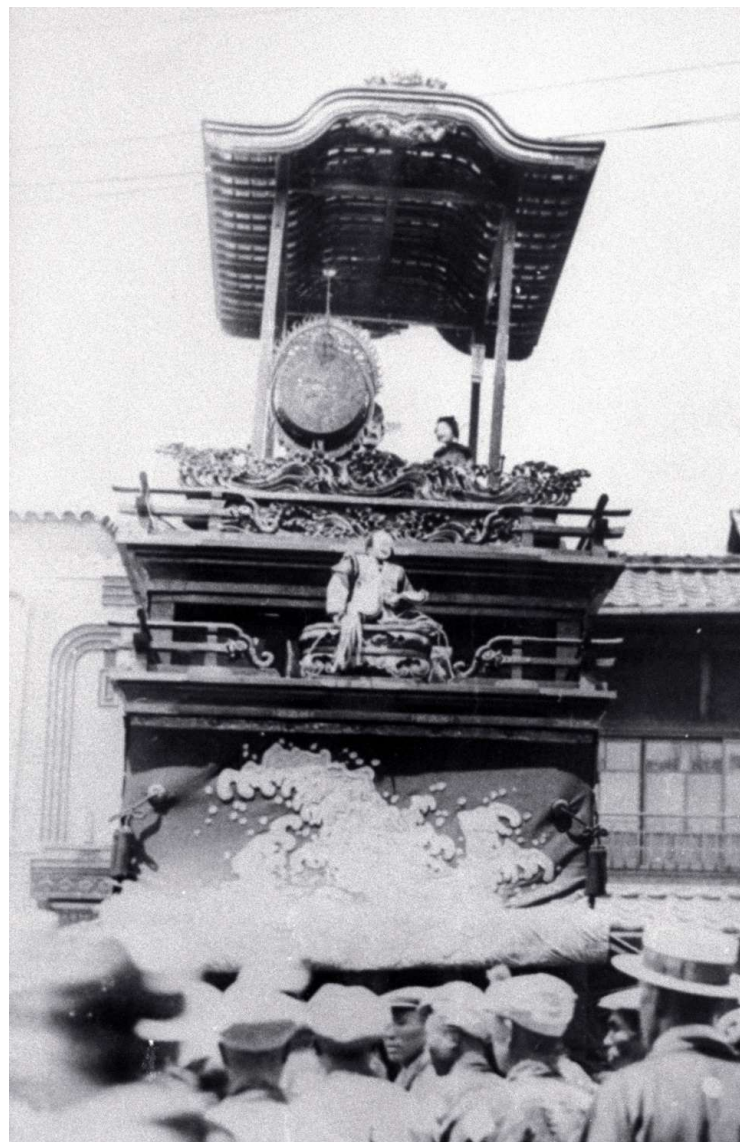
猩々緋に怒涛の縫い潰し

下絵は張月樵の筆、わざわざ遠州へ出張して大波を写した素晴らしい幕

◆水引幕

花色羅紗の群鶴の縫どり

下絵は森高雅の筆、縫は最も精巧なもの



門前町 陵王車

明和5年作(1768)

- 延宝2年(1674)花車を造る
- 延宝3年(1675)鶴(頼政)車に替る
- 天和2年(1682)中絶する
- 貞享3年(1686)大神楽車に替る
- 明和5年(1768)陵王車に替る

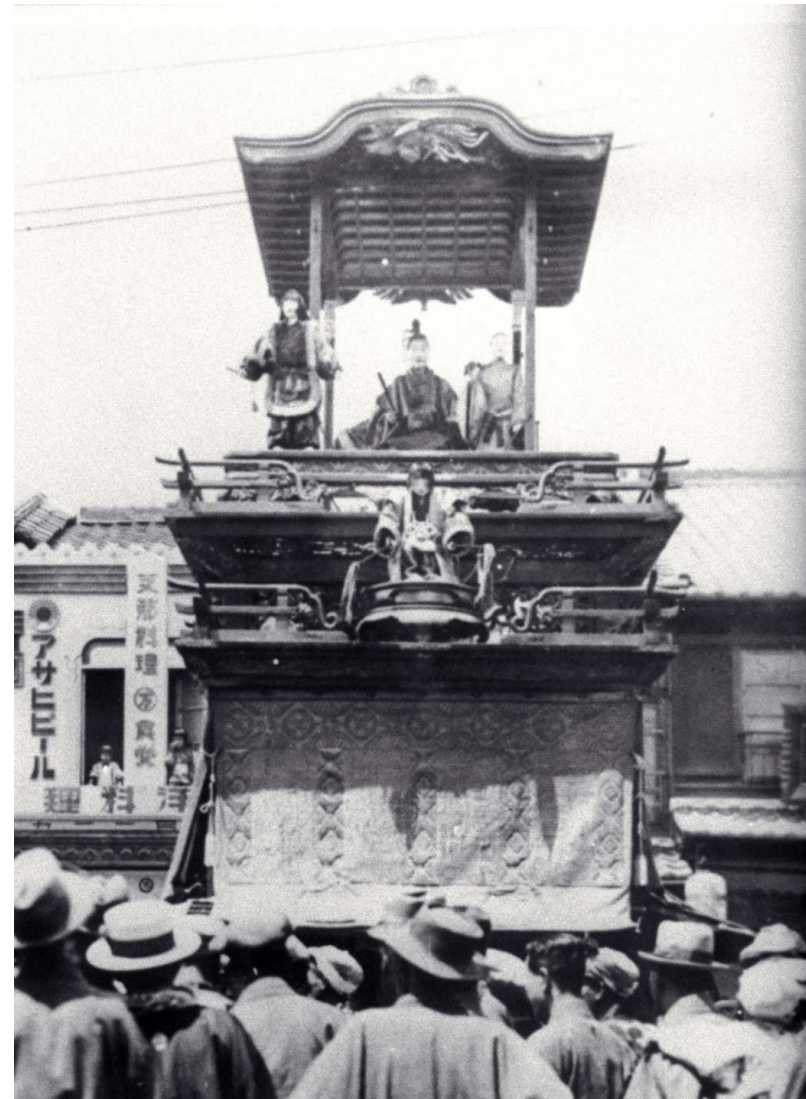
大将には京極太政大臣宗輔公を据へ一人の太刀持ちを配置して、前に舞樂の陵王を置き舞をする

◆大幕

猩々緋に金糸で簾の縫い

◆水引幕

薄色地に紗綾形と橘の金糸の織出し



末広町 初代黒船車 (美濃市相生町で現存)

延宝2年作(1674)

- 延宝元年(1673)船車を造る
- 延宝2年(1674)黒船車に替る
- 明和9年(1772)に黒船車を新造
旧車を美濃市相生町が購入

子供の能の舞い

猩々、春日龍神、船弁慶の三番

明治31年、舞の舞台に、神功皇后と
武内宿弥が舞を演じるからくり人形を
乗せた(六代目玉屋庄兵衛の作)

◆幕

初発は緋緞子

明治31年に猩々緋に大浪の
金糸縫いに替る(山本梅逸筆)



■警 固

寛文4年(1664)に神社の造営があり、氏子町内が整ったので簡単な警固の祭礼が始まる。寛文11年(1671)に笠鉾が出て本格的な祭礼となり各町より警固が出される様になった。延宝2年(1674)に黒船車を始め5輛の山車が加わり、延宝4年に7輛の山車が出揃った。明治維新を向かえ御神事は中絶になったが、明治32年(1899)に仁徳天皇台1,500年に当って御神事再興になり新式の警固の祭礼が始められた。

宝永4年(1707)以前の警固

- ① 櫛 矢場町
- ② 獅子 矢場町
- ③ 大母衣 富田町・福井町より二走出す(江戸時代末期に廃絶する)
- ④ 鉾 鉄砲町(延宝2年鉾一人と警固九人を出し翌3年鉾六本になる)
- ⑤ 黒熊之鎧 上本町(延宝2年黒熊之鎧拾本を出す)
- ⑥ 諸役人 茶屋町・長者町・小桜町・小田原町・永安寺町・諸町・呉服町・常盤町等より出す
- ⑦ 御神宝他 信長公奉納の甲冑・豊臣家の陣太鼓・太刀・矛・張弓等

明治32年御神事再興の警固

- ①大母衣 末広町より一走出す (額の文字は横井北泉の筆)
- ②大獅子 前塚町
- ③具足警固 矢場町
- ④狩衣警固 裏門前町

